

2019年

7月10日
第328号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

家庭という幻想

園長 児嶋 草次郎

アジサイのシーズンも終わろうとしています。最近来訪されたお客の中に、量子力学を専門とする人がおられて、その方の説に従えば、アジサイの花の出す波長が子供たちの発散するマイナスの波長を今年は随分吸収してくれたのではないかと感じています。量子力学的に石井十次の活動も説明できるのだそうです。私なりに解釈するならば、石井の偉さとは、この宇宙のエネルギーを味方にできたということになるのでしょうか。石井自身も次のように書いています。

「至誠あれば神動き神動けば人動き人動けば天下動く」（明治27年5月23日 石井十次日誌）

そう言えば、吉田松陰も、孟子の「至誠」という言葉を大事にしました。（「至誠にして動かざるは古より未だこれあらず」）

私たち凡人にはとても真似のできない世界ですが、石井十次の残してくれたこの大自然と福祉文化の中で、できるだけそれらに波長をあわせながら、これからも生活したいものです。アジサイは、今年も300本ほど園内に植え、新たにまた300本ほど挿し木をしました。

以下、児嶋虬一郎・登美記念式での挨拶です。

皆様、本日は、児嶋虬一郎・登美記念式に御出席くださいまして、ありがとうございます。石井記念友愛社を代表して、一言、御挨拶申し上げます。

本日は、石井記念友愛社にとっては創立記念の日であります。創立記念の日とは次のことを意味します。昭和20年、日本が太平洋戦争に負けて、多くの子供たちが戦災孤児として社会に投げ出されました。その子供たちを救出し、親代わりとなって育てることを目的として事業が再開されました。立役者が児嶋虬一郎・登美です。その時寄り所としようとしたのが、石井十次の理念です。

「再開」と言うのは、石井十次の理念を掲げて、石井十次が取り組んだ子供たちの養育・教育事業に再挑戦しようとしたわけです。それから今年で74年という年

月がたちます。

家や構築物は時とともに風化していきますが、人々の思いも年月の積み重ねの中で、時代状況の変化とともに変わっていきます。しかし、変わってよいものと変わっていけないものがあります。創立記念の日を設けることで、もう一度、その原点に立ち、その理念や方針、そして目的等を再確認し合い、その時代の変化に合わせて整理し直してみることが出来ます。皆様それぞれに御縁があつてここに集っています。それぞれの御立場で、戦後 74 年を振りかえりながら、次の時代へ向けての足場を再確認していただけたらと思います。創立記念の日とは、それらの再確認をし合う日です。

さて今日は、友愛園の子供たちも出席していますので子供たち向けの話をしたいと思ひます。厳しい話をしますので、しっかり聞いてください。

まだ1週間たっていません。7月2日の新聞(読売)に「2歳娘3日間放置死亡」と見出しのついた記事がありました。宮城県仙台市に住む母親(25歳)がアパートに2歳11か月の長女を3日間にわたつた食べ物も与えず放置し、帰つてみたら死亡していたというのです。胃の中にはもちろん何も入つてなかつたそうです。逮捕された母親は、「育児に疲れ、一人になりたかつた」と述べたそうです。

さらに約1か月前(6月5日)には、札幌で同じような死亡事件が起きています。こちらはもっとひどくて、やはり2歳女児ですが、体重は平均(約12キロ)の半分くらいしかなく、体にはタバコを押しつけたりした複数のアザがあつたそうです。母子2人で生活していたのですが、母親に男性ができてから、この虐待はひどくなつたようです。こちらの母親ももちろん逮捕されました。

まだ2歳の女の子。どんなに淋しくつらかつたことだらうかと思ひます。しかし密室アパートの中で、だれに助けを求めることもできず、訳も分からないままにこの世を去ってしまったのです。だれも彼女2人を救えなかつたことを無念に思ひます。

家庭において殺されるのは、小さい子供だけではありません。6月1日には、東京において、76歳の男性が44歳の息子(長男)を家で包丁で刺し殺しました。この事件の引き金になつたのが、5月28日、神奈川県川崎市でおきた殺傷事件です。バスを待っていた児童生徒等20人を、51歳の男が包丁を持って襲い2人が死亡しました。その男は直後に自殺していますので、その動機等は分からずじまいです。

東京の76歳の男性は、我が息子が同じような事件を起こすのではないかと心配し、悩んだ末に、息子を犯罪者にさせまいと、刺し殺し、自らがその罪を背負おうとしたのです。新聞等によりますと、その44歳の息子は、ひきこもりがちで、両親に対しても暴力を振っていました。ある週刊誌(週刊文春)によりますと、『私

の両親は私の教育を間違えていた。(自分の)性格が螺旋階段のようにねじくれ曲がった』とツイッターに書きこんでいたそうです。表面的には、この76歳の男性は、東大を卒業し、農林水産省に入省し、次官にまで登りつめた人ですから、世間から見たら成功者です。しかし、家庭内は地獄絵図のような状況下にあったようです。この44歳の息子には、恐ろしいほどの両親への不信感、憎しみ、うらみがあったのだと思います。

一方のスクールバス殺人犯(51歳)の方は、幼児期に両親が離婚し、伯父さん夫婦に引き取られ、後では祖父母も同居し、厳しく育てられたようです。祖父は警察官だったと週刊誌には書いてありました。おそらく両方の家庭とも、間違っただけが行われたわけではないと思います。どこかの時点でボタンのかけ違いが生じ、そのことに互いに気付かないままに年月だけが過ぎ去っていったのではないかと。血はつながっているのだけど、相性(波長)が悪かったのではないかと。伯父さんの家には実子(従姉妹)もいて、もしかしたらこの男は小さい時から、被差別感を抱き続け、やがて自分を捨てた両親への憎悪感、人間たちに対する不信感等を増幅させるようになったのかもしれない。いずれにしろ重要なことは、この40代50代の男性は、自分の運命を変えることができないままに年月を重ねてしまい、破局を迎えてしまったということです。このように社会にうまく適応できず、このような深刻な事態にはならずとも定職を持たず、家に閉じこもりがちな青年が、日本には60万人から100万人いると言われています。児童養護施設等に生活する子供を4万人とすると、すごい数です。

以上話しました4つの事件は、できれば話したくない、おどろおどろしい事件ばかりです。気持ちが悪くなるほどの事件の話を、今日はあえてここでさせていただきます。なぜなら、ここにいる友愛園の子供たちにとって、他人事ではない話ばかりだからです。

4つの事件に共通していることが一つあります。それは、いずれも「家庭」という空間の中で生活しておきたということです。最近、「家庭」優先主義が横行するようになっていますが、ここにいるみんなにも、「家庭」に帰れば平和や幸せが待っているわけでもないということを教えてください。

みんなそれぞれに背負っているものが違います。家庭の状況も違います。中学生になったものは、6月にそれぞれ将来への夢作文を書きました。私も6月末に一人ひとりの文を読ませてもらい、感動しました。中学1年生ですでに、高校・大学と進学し、将来は、友愛園の保母さんになりたいと書いてくれていて、うれしかったものもありました。高校3年生で、大学だけではなく大学院まで行って、心理士(カウンセラー)になると決意しているものもいて、頼もしく感じました。

ここで次に、中学生以上のおみんなにお願いしたいことがあります。自分の家庭を

客観的に分析してみるという取り組みです。私は、みんながここに来た理由を、すべてが親の責任だとは思っていません。今の社会状況の中で、先ほどの事件でも指摘しましたように、どこかでボタンのかけ違いをしてしまったということもあり得るのです。孤独と生活苦の中で、判断能力を失っていくということもあり得るのです。そういう時は一時的に親子離れて、互いにどこに問題があったか、冷静に時間をかけて分析し直してみるというのが一番良いのです。先ほどの事件のように親への不信、憎しみを抱いたまま生き続けるほど不幸なことはありません。それでは運命は変えられません。

私たちは友愛園の生活を、運命を変えるための修行と位置づけています。親子関係を再構築するためには、親だけが変わることを要求するのではなく、この友愛園生活を通し、基本的な生活習慣を年齢相応に身につけ、自己コントロール力も身につけ、親への感謝の気持ちも身につける等、自らも親からの期待、信頼に答えられる人間になるための努力が必要です。「家庭」に帰れば背負っている課題が自然に解決するわけではありません。自分自身の生活習慣の未熟性、自己コントロール力の弱さ、親への不信感等が解決されないままに帰れば、結局また波長が合わず、親を精神的に追い込むことになり、再び破綻・崩壊するということもあり得るのです。

施設で生活しながら、時々面会や帰省で親子関係を少しずつ修正しまた育てて、一方自分はしっかり学び修行し、自ら大学等に進学し、世のため人のためになる仕事につき、将来、親孝行をするということもできるのです。親御さんと一時的に離れている間に、やるべきことはたくさんあります。時間を無駄にせず、今与えられている生活をチャンスととらえ、精一杯の努力をしてください。

創立記念の日に、児嶋城一郎・登美の墓前においてこのような大事な話を子供たちにさせていただきました。それぞれしっかり自覚自重して、この夏を乗り切ってほしいと思います。

本日は御参列くださりありがとうございます。